

## モデルネの延長としてのポストモデルネ

古澤 ゆう子

ポストモデルネと名付けられた活動の流れには建築、絵画、文学のような芸術分野から哲学、文献学、神学にいたるまでさまざまな表現形態がある。しかし、どの分野においてもはじめからひとつの方向性を示していた。つまり芸術や哲学や宗教がいかに相対的であるかを明きらかにしながら、モデルネの傾向の仮面をひとつひとつ剥いでいこうというのだ。現実や美や信仰や人類の幸福に関する一元的見方に対する批判であり打破である。哲学を例に取れば、古代中世哲学思想や啓蒙主義の人類救済や、精神存在を証明しようとする観念論的目的論や、歴史主義の意味の解釈学や、富こそ人間を幸福にするという資本主義や、自律への人間解放をめざすマルクス主義、こういう考え方をきっぱり捨てるべき時が来たと

いう。<sup>(1)</sup> これらの思想はすべてリオタードなどに言わせれば、「大言壮語(Grand reits)<sup>(2)</sup>」以外のなにものでもなく現実とはかかわりのない虚構であり唯名論的概括にすぎないとされる。このような「メタ言説」は現実世界全体を説明すると驕りながら約束を果たしたことがない。それどころか多分にファシズムやテロリズムにつながる危険性を持っている。この間の歴史がそれを教えてくれると言っているのだ。それゆえポストモデルネが総体として目標にしているのは、モデルネの諸分野に見られる絶対的主張が主観的構造主義にすぎないことを示して、「唯一」とか「包括的に」とか「絶対的に」正しいという主張すべてに反論していくことである。

しかし、現実世界を包括的に説明することはできない

との意識はポストモデルネの前から近代(モデルネ)思考にすでに存在しており、近代の進展とともに増大していった。ニーチェのニヒリズムや一九世紀末の頹廢志向などがその典型であろう。それゆえポストモデルネはなにかまったく新しいことを前衛的にはじめたというよりは、独占的包括的思想の致命的欠陥を包括的に根本的に絶対的に認め(ここに言語矛盾があることには気付かず)純粋な根元的多元主義のみを肯定しようというものである。

こうしたポストモデルネの主張を現実化する方法にはつぎのようなものがある。一元的秩序をもつものすべてを解体して多元的観点に移す「脱構造」や「脱構築」。構造的なものはいっさい認めない「ポスト構造主義」。一元的な表現をもつものすべてを記号や言説や虚構や主観とみなす「記号論」。

この方法を用いてポストモデルネが資本主義やマルクス主義や、歴史主義や啓蒙主義や、芸術や文学の個々の流派にむけた批判は多種多様であるが、個々の相違にもかかわらず批判の対象となったのはつねに「理性的」概念的思考であった。<sup>(3)</sup>「理性的」思考は抽象的で空疎であるがゆえに現実の多面性には応じきれないという見解だ。

そして多元的なものをつねに一元におとしめ、教条的ですべてを固定化し具象化し、時代の変化を考慮せずに保守的で反動的で、絶対的構造主義を利するものだと非難される。科学技術による搾取、環境汚染、官僚的規制、主知的男性支配といった現代社会の不幸すべての元凶だと位置づけられる。

このような理性的思考に対してポストモデルネが推奨するのは「審美的」思考である。<sup>(4)</sup>「審美的」(エステティック)の語源はギリシア語のアイステーシス(知覚もしくは感覚)だが、ここで言われる「審美的」とは文字どおり「感覚的」を意味し、考えより感じを優先して、頭より感覚を使えとの主張である。抽象的推論に拠ることをやめ、感覚を通して現実の多面性に目覚めねばならない。(テレビ等のマスメディアに媒介された映像と音響のあふれる現代世界はまたこれにふさわしい理論をもつべきだともいう。)ただしその際五つの感覚は理性からの距離によって格付けされる。視覚は対象に対して間隔をとる、すなわち直接的感触なしに隔たりをもって客観的に対象を把握するので、あまりにも概念的で理性に近いとみなされ触覚より下に格付けされる。<sup>(5)</sup>それに対し

て触覚は感覺性を十分に發揮し、対象に密着して感じるという直接的対象把握をおこなうからより現実に近いというのだ。ところが、このような五感のランク付けはポストモデルネによってはじめてなされたものではない。古代のプラトーンから中世のトマス・アキナスにいたるまでは、ポストモデルネの主張とは逆に視覚と聴覚が五感のヒエラルキーの上部を占め触覚の地位がもっとも低かった。美を認識できるのは目と耳だけだとさえいわれていたのだ。ところがデイドロやヘルダーが順位の逆転をおこない触覚の地位の向上をはかっている<sup>(6)</sup>。つまり感覺による複雑多岐な現実の直接体験と、冷たく抽象的な理性の間接的概念把握という対比の構図は一八世紀末にはすでに描かれていたといえる。

このようにみてくるとポストモデルネは歴史上あらわれたさまざまな思想をすべて「メタ言説」か多元化かという概念(だけ)でくくる傾向を持ち、前者を拒否して後者を肯定するという顕著な特長をもつことがわかる。しかし、思想史をたどればこれはモデルネに典型的な特長であって、強いてポストモデルネの特有性を探せば、この傾向を先鋭化させたことであろう。

理知を排した直観の認知こそモデルネ創設の基盤である。近代思想は中世のスコラ哲学に対するきびしい批判によって始まっている。スコラ哲学は普遍命題から理論を組み立てるといふ演繹的性情を持つが、これが感覺や経験による修正をいっさいせず理屈だけで偏狭な理論を固定する教条主義だとみなされたのだ。そしてそのためにこそスコラ哲学の思想構造は空疎な推論にすぎず自己の欠陥に無自覚であると非難された。

すでに一四世紀にはスコラ哲学に対抗しようとする自然科学の新手法が始まっている。感覺による経験(つまり実験)を照査する方法がさぐられ、フォマラティデッデン(Fomalattenden)と呼ばれる手法が導入され、これこそ正しい方向への一歩だと信じられたのだ<sup>(7)</sup>。フォマラティデッデンとは縦と横に異なる媒介変数を書き込む四角い図表である。たとえば縦に膨張変数、横に温度を書き込むことにする。そして液体を熱して温度と膨張率をそれぞれの場所に書き込めば、実験の結果が人間の主観ではなく整理された直線または曲線であらわれる。要するにグラフであるが、このような方法を使えば感覺そのものに直結する正しい理性の用法によって自然法則

を知ることができ、このようにすれば形而上的普遍命題から三段論法で演繹的に推論する必要はないと考えられたのだ。

近代自然科学のはじまりはスコラ哲学の元締めとみなされていたアリストテレスへの誤解から起こったものと考えられる。アリストテレスの認識論においてはアイステシス自体がすでに認識のひとつなのだ。アイステシスはもともと五感のもたらす情報の受容という意味を持つが、もちろん感覚器官そのものことではないし、外的要因によってのみ活動を開始する受動的機能でもない。精神の能動的はたらきが始まるのはじめて、見たり聞いたり嗅いだり味わったりが可能になるのだから精神のはたらきなしには眼は開いていても見ず、耳は音をとらえず、舌も味わうことがないし、どんなに敏感な皮膚も触れたものの情報を主体に伝えるということがない。そのように考えたアリストテレスは対象との直接的な接触を知覚するというアイステシスを精神の認識機能の一形式とみなした。ただしアリストテレスにとって精神の認識形態はアイステシスだけではない。感覚ではなく抽象的で普遍的な知識をもとに思考する知性

(ヌース)が存在するのだ。このふたつの認識形態論は肉体と精神の分裂といった単純な二元論に向かうものではない。感覚的認識も知性的認識もともに精神のはたらきであり、それぞれ異なる役割をはたす。両者は相互に作用して現実世界を異なる方法で認識しながら主体の行為を決定していくと考えられている。<sup>(8)</sup>

ところがこの認識論に対して古代のストア派の哲学者たちは、感覚を能動的な精神活動と知性から引き離して受動的な機能にとらえた。それゆえ感覚によって伝えられたものは頭の中で「意識され」なければならなくなる。意識されない情報は精神活動に影響を与え得ないからである。この「意識化」という段階で情報を整理し合理的な部分と不合理な部分を種分けするはたらきだが、ストアのいう理性である。このストア的思想の影響を受けた科学者たちが前述の自然科学的手法を編み出したと考えられる。

すでに中世末期のスコラ哲学批判にみられるこのような方法論の対立は、感覚に直結する理性が存在し、これこそ信頼に値するとの新しい考え方を生み出したが、これが周知のごとくこの後の近代の発展に重要な役割を演

ずることになる。感覚的理性への信頼はルネサンス初期に第一の盛期をむかえる。とくにフィレンツェの新プラトーン派において顕著だったのだが、彼らは世界の精神性、すなわち神が美においては感覚でとらえ得ると考え、プラトーンのエロース論をキリスト教的に解釈し直している。神は愛(エロース)の力にうながされて世界のさまざまな現象のなかに流出しており、その姿がもっともあきらかに現れるのは美においてである。そして、人間は罪を犯したがゆえに地上にしばりつけられているが、美を恋い慕いより高きものをめざすことで罪をつぐなうことができるというのだ。肉体性を脱し精神性をめざすための感覚の効用が発見されたと言ってよいかもしれない。<sup>(10)</sup>

ここにおいてプラトーンが感覚と理性を統合させる哲学の元祖にまつりあげられ、中世スコラ哲学の教祖アリストテレスに対抗する強力な切り札として使われることとなった。そして、このようなアリストテレス的スコラ哲学対プラトーンという図式が「古代」と「近代(モデルネ)」の対比概念へとつなげられていくのだ。同時に古代ストア哲学をあたらしく見直し受け入れていこ

うという土壌がととのえられてゆく。というのもストアの認識論によれば知識はすべて、ただ感覚だけを通じて直接に取得されるというのだからだ。<sup>(11)</sup> プラトーン思想においてもアリストテレスの思想においても感覚を通じてもたらされる対象の内容を吟味するのがギリシア語でロゴス、ラテン語でラティオと呼ばれる理性であったはずなのに、ストア派の教えではこの理性のはたらきが、制限されている。前述のように感覚のつたえる表象のうち現実に対応する明確な部分だけを事実と認め、非現実的で不明確なものを排除するのが理性の役目だと考えるのだ。

このストアの思想がルネサンス期には有名なユストゥス・リプシウスの哲学史などによって広く知られるようになった。そして特にデカルトのスコラ哲学批判において近代思想の基盤にあたらしく組み込まれることとなったのである。すなわちデカルトによれば理性とは一括して、表象する意識を明確にするだけのものであるというのだ。古代・中世の思想家たちが感覚的認識と知性(ヌース)に区別してきた精神の異なるはたらきは彼によって受動的受容機能におとしめられてしまった。<sup>(12)</sup>

このように中世末期からすでに感覚による認識と知性による認識と理性とのかかわりや矛盾が論議されてきていたが、デカルトによってはっきりした方向が定められたと言えよう。これ以後の近代思想は理性のこの定義を受け入れます。反知性的傾向を強めていくのである。

「判断力 (Urteilskraft)」「鑑識眼 (Geschmack)」「批判 (criticism)」「常識 (Common sense)」といった概念が導入され、一六世紀から一八世紀にかけて、イタリアのフィレンツェからフランスのデカルト、イギリスのフランシス・ベーコンやハチソン、そしてドイツのカントにいたるまでのさまざまな思潮の中で、人間にとって現実世界の美と真実は直接的な観照によって把握可能であるとの議論が展開された。このようにして古来の知性 (ノース) による観照と感覚 (アイステーシス) による観照という概念が、合理不合理を識別する能力、つまり抽象性のみを理性とみなす意識性にとってかわっていったのだ。

この傾向は美の研究つまり美学の「発見」へとつながっていく。典型的な例をあげれば、ライプニッツやクリスティアン・ヴォルフの思想を受け継いだゴットリー

ブ・アレクサンダー・バウムガルテンが、一七五〇年代に「アエステティカ (審美)」を著した。このなかで彼は精神機能のなかでも下級のものとされている感覚にしか多元的な現実世界が完全には把握できないと主張する。それに対して抽象的理性は明確さと確実性という点では感覚をしのぐとしても、把握した内容の多様さでははるかに劣るというのである。

このように一八世紀のバウムガルテンにおいてすでに、ポストモデルネにきわめて近い理論ができあがっていたことが明らかだ。ただひとつポストモデルネと根本的に異なっていたのは彼が、感覚でとらえられるこの現実の多元性のなかに現実の美と完全性が認められると確信していたことである。数十年後のカントもまだ同じような確信を持っていた。

啓蒙時代の美学を引き継いだドイツの観念論はさらに論を進めて、美の感得を基礎においた審美哲学といったものを創設しようと試みた。そして同時代の文学を人間と自然の分裂による自然観の変遷によって説明しようとしたシラーがいる。彼の説によれば人という主体と自然という客体が分かれて対峙するという「知性の自律」に

よってはじめて自然そのものが美として認識され詩的对象となることが可能になったのだ。<sup>(13)</sup> 観念論がこのようなやりかたで現実のなかの合理性と美をきわめる立場をとったことが、つぎの時代の思想家たちに現実の中の不合理や醜さに眼を向けこのような否定的側面も実在と認める努力をさせる契機となった。<sup>(14)</sup>

一九世紀の文学、芸術、哲学においては各派のあいだで現実の相対的、否定的、断片的側面が強調される傾向が増大して行く。もはや世界は秩序ある精神性によって統合されたものでもなければ、美的均衡を保つものでもなく、その一体性さえ否定された。しかしポストモデルネの理解にとって重要な発展はなによりもランケやドレイゼンやディルタイ等の歴史主義といわれる思想の形成だと言えよう。たとえばディルタイの精神的体験と理解の解釈には、すべての歴史的現象を相対的、多元的にとらえる姿勢が一貫して見られるのである。<sup>(15)</sup>

ポストモデルネの思想家はディルタイの提唱する「意味の解釈学」が現実を画一的な概念に押し込めようとする「単純化」だと批判するが、そうではない。現実の相対性と多元性はもはや看過できないしするべきではない

という彼の「絶対的要請」はまさにポストモデルネと同じ方向を向いている。

すなわち宗教、芸術、学問、社会、といったあらゆる歴史現象の相対性多元性を確信するがゆえに感覚的直接体験の優越性を主張する思考は近代初期から再三再四代弁者を見出し出しており、ポストモデルネはその延長上にあると考えられる。ポストモデルネの特異性はといえ、この志向を理論化し先鋭化したことだけと言えよう。ポストモデルネはモデルネの反知性的側面をいまいちど強調し明確にしたが、モデルネの克服ではないし、当然モデルネの突き当たった袋小路、アポリアの克服にも成功していない。

モデルネが本当に克服されねばならないとするならば、モデルネの歴史的本質的起源をふまえたうえで、ポスト・モデルネの名称にふさわしい概念が考察されねばならない。特に近代初期におこなわれた脱理性化がどのような意味を持ちどのような結果をもたらしたかの検討が必要である。近代以前には感覚も知性も現実を直接に認識する精神機能であると考えられていた。プラトーン、

アリストテレース、新プラトーン主義を受け継いだ中世の伝統的思想にとっては、まさにこの精神機能こそ確実な現実認識の手段であった。ところがデカルト等の近代思想家は思考という概念を縮小して「意識」という概念に置き換えこれを理性と呼んだ。しかし、知性と感覚による認識作業は意識の前段階でおこなわれるから、従来は理性的精神活動とみなされてきた部分が顧みられなくなる。古代（おもにプラトーン、アリストテレース）の影響を受けた中世哲学によって分析、等級づけられてきた人間の認識能力に関する理論はここで、（ストア哲学の理論を受け入れ）人間の思考を一元的な意識のみに制限してしまったと言える。この逆転の過程を仔細にあとづけることによってのみ、ポストモデルネが本来批判すべきモデルネの欠陥、特に感性と理性の極端な対立があるからになり、モデルネの超克が可能となるはずである。

- (一) Wolfgang Iser, Postmoderne oder ästhetisches Denken-gegen seine Mißverständniss verteidigt, in: Günther Eifer, Otto Saame, Postmoderne. Anbruch einer neuen Epoche?, Wien, Passagen Verlag, 1990.

237-270.

- (二) Jean-Francois Lyotard, Le Postmoderne expliqué aux enfants, Paris 1986, 53 ff.
- (三) Hartmut Böhme und Gernod Böhme, Das Andere der Vernunft, Frankfurt am Main, 1985; Wolfgang Iser, Unsere postmoderne Moderne, Weinheim 1988 (2. Auflage).
- (四) Jean-Francois Lyotard, Essays zu einer affirmativen Ästhetik, Berlin 1982.
- (五) Gert Mattenklott, Das gefäßige Auge, Frankfurt am Main, 1988.
- (六) Johann Gottfried Herder, Plastik, in: Genie, Kunst, Dichtung, Herg. von Franz Schulz, Potsdam 1943, 3-13; Kritische Wälder oder Betrachtung über die Wissenschaft und Kunst des Schönen. Viertes Wäldchen über Riedels Theorie der schönen Künste, in Schriften zur Ästhetik und Literatur, 1767-1781, Hrg. von Gunter E. Grimm, (Deutscher Klassiker Verlag), 1993, Bd. 2, S. 247-442; Denis Diderot, Brief über die Blinden zum Gebrauch für die Sehenden, in: Philosophische Schriften, Hrg. von Theodor Lücke, Bd. I, Frankfurt am Main 1967, 49-110.
- (七) Anneliese Meier, 'Ergebnisse' der spätscholastischen Naturphilosophie, in: Ausgehendes Mittelalter I, Rom 1964, 425-458; Das Problem der Evidenz in der Phi-



Iosophie des 14. Jahrhunderts, in: *Ausgehendes Mittelalter II*, Rom 1967, 367-418; Die Vorläufer Galileis im 14. Jahrhundert, Rom 1949.

(8) トキマツトヨシキ『リトリック概論』——517頁参照。

(9) K. Hülsler, *Die Fragmente zur Dialektik der Stoiker*, Bd. 1-4, Übersetzung und Kommentar, Stuttgart 1987.

(10) トリエーラン『ピュタゴラス』240d『叢書』210 e-212 a 及び藤田一美『存在論としての価値論』東京大学文芸部 養正学術研究所紀要31-1994年 311-194頁参照。

マキヤノスのトリエーラン著及び編『マールシオ・フィノ、Commentarium in Convivium Platonis de Amore, Hrsg. von P. R. Blum, Hamburg 1984 (=philosophische Bibliothek 384) 参照。

(11) M. Hossenfelder, *Die Philosophie der Antike III* *Stoa, Epikureismus und Skepsis* (Geschichte der Philosophie III, hrsg. von W. Röhbe), München 1985, 44-69.

(12) 拙稿『悲劇的イデオロギア』『トリエーラン』517頁参照。

(13) 拙論『我が秋山』『人文自然』517頁参照。

(14) Christoph Jammé und Helmut Schneider (Hrsg.), *Mythologie der Vernunft*, Hegels ältestes Systemprogramm des deutschen Idealismus, Frankfurt am Main

1984.

(15) H. U. Lessing, *Die Idee einer Kritik der historischen Vernunft*, Wilhelm Dilthey's Erkenntnistheoretisch-logische-methodologische Grundlegung der eisteswissenschaftlichen, Freiburg, München 1984.

近代思想史の文壇をめぐってトリエーランの著作に  
関する私の知見を述べてみる。P. マキヤノス教授の論文  
を引用する。

Arbogast Schmitt, *Kritische Anmerkungen zum neuesten Wissenstandsgriff aus der Sicht des Alpbhologen*, *Gymnasium* 98, 1961, 232-254.; *Zur Erkenntnistheorie bei Platon und Descartes*, in: *Antike und Abendland*, 35, 1988, 54-82.; *Das Bewußtsein und das Unbewußte in der Deutung durch die griechische Philosophie* (Platon, Aristoteles, Plotin), in: *Antike und Abendland* 40, 1994.; *Klassische und platonische Schönheit*, *Anmerkungen zu Ausgangsform und wirkungsgeschichtlichem Wandel des Kanons klassischer Schönheit*, in: *Klassik im Vergleich*, Normativität und Historizität europäischer Klassiken, hrsg. von Wilhelm Volkamp, Stuttgart, Weimar 1993, 403-428.; *Das Schöne: Gegenstand von Anschauung oder Erkenntnis? Zur Theorie des Schönen im 18. Jahrhundert und bei Platon*, in: *Philosophia*, Yearbook of the Research

(39) モデルネの延長としてのポストモデルネ

Center for Greek Philosophy at the Academy of  
Athens, Athens, 17-18, 1987-1988, 272-296.

(一橋大学教授)